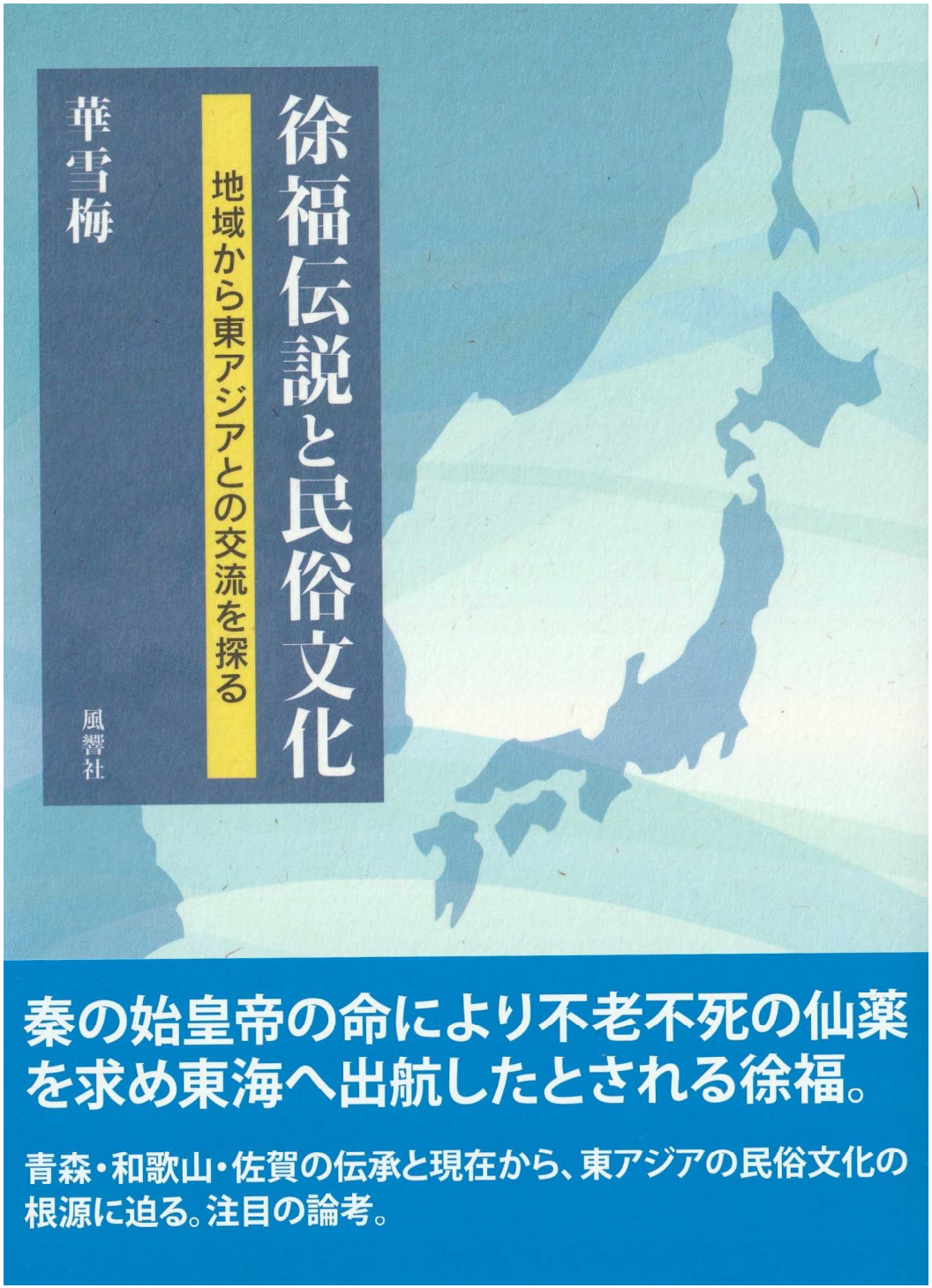
序文

徐福は、二二〇〇年も前に秦の始皇帝の命を受けて、数千人もの童男童女を連れて不老不死の薬を探すために東の海に乗り出した、と言われている。徐福は中国に帰らなかったので、どこに着いたのか、さまざまな伝説がある。現在日本の各地にも、その伝説はある。そして、近年徐福伝説が各地で語られ、徐福の祭りまで行われている。二二〇〇年も前の中国の偉人が、なぜ日本の各地で祀られているのだろうか。

いったい日本における代表的な徐福伝説は、何か所にあるのか。南は鹿児島県南さつま市から、北は北海道富良野市まで、ほぼ三〇か所は越える。そのほとんどの地は沿岸部に散在しており、さらに徐福が日本の熊野信仰など山岳信仰と結びついて修験道とも関連を持っている。本書では青森県中泊市、和歌山県新宮市、佐賀県佐賀市の徐福伝説について、中国からの留学生であった華雪梅さんの博士論文としてまとめられている。

青森県中泊市の徐福伝説は、すでに二〇〇年も前の『菅江真澄遊覧記』に書かれている。徐福一行は、九州で嵐に遭ったので、日本海を流されて小泊岬に辿り着いたという伝説がある。小泊岬にある尾崎神社は、熊野権現と因縁があり、そこに航海安全の神として徐福が祀られている。徐福は、この地域で行者ニンニクなどの仙薬を発見したと言われているが、この仙薬は、実際には修験者が山で見つけた薬草である。そして、二〇一三年から「中泊徐



福まつり」が行われていて、徐福のシンポジウムがあるだけではなく、郷土芸能やマグロの解体ショーも行なわれている。徐福を通して、町おこしに結びついている。

和歌山県新宮市に伝わる徐福伝説は、古い歴史を持っている。徐福公園には徐福の墓があり、江戸時代に建てられている。大正時代には、熊野青年会員によって徐福保存会が結成され、活動が盛んになっている。戦前には中国との交流があり、中華民国神戸副領事が参拝して、徐福廟が建設された。戦後になると、徐福花火大会が行われ、仏教会とも関連して初精霊供養と水施餓鬼が行われ、さらに徐福の墓碑を中心に盆踊りが行われた。現在は、統合されて「熊野徐福万燈祭」として五万人も参加する大きな祭りになっている。

佐賀県佐賀市の金立山に金立神社があり、そこに祀られる金立大権現が徐福であるという伝説がある。徐福は、農業の神であり、雨乞いの神であるという信仰は、江戸時代からある。徐福が金立山で弁財天女から授かったという、フロフキの仙薬がある。さらに、地元のお辰と徐福は恋仲になったが、フロフキは不老不死の仙薬ではなかったので徐福はさらに他出し、お辰は悲しみのあまり他界した。そして、お辰観音として祀られている。このように、佐賀でも徐福の伝説は多くある。

多くの地域で、徐福の伝説が広がっている。そこには、共通性と地域性がうまく関連している。徐福は仙薬を求めて日本に来たという事は各地で語られるが、その仙薬の内容は各地で異なる。さらに、徐福の伝承地は、海と山に結びつく。私は、鹿児島県のいちき串木野市で、海岸にある徐福上陸の場所と熊野権現を祀る冠岳にある日本一大きな徐福の像を見た。徐福の像は、農耕と五穀の豊作を祈願するという。日本における徐福伝説は、山の熊野権現と結びついている。

他方、徐福は中国から来たわけで、現在では、中国の各地で徐福の出発地としての伝説から、それぞれの地域で像が作られたり活動が盛んになっている。徐福の出発地は、浙江から山東に多く、そこから東海に出ると韓国に行くことが考えられ、韓国では徐福が上陸し、さらに日本に渡ったという徐福の伝説がある。徐福を東アジアの交流の視点で見ると、中国と日本だけでなく、韓国との交流も合わせて中日韓の国際交流ができる。著者の華雪梅さんは、日本の文化を学ぶ中で日本における徐福伝説をまとめたが、中国における徐福の出発伝説も研究をすでに始めている。さらに、韓国での徐福伝説も、本書でまとめている。本書は、日本を中心に徐福が様々な地域の文化と結びつき、現在において民俗学的にも展開していることが興味深く読むことができる、まさに良書である。

二〇二〇年三月

小熊　誠
（神奈川大学歴史民俗資料学研究科　教授）

まえがき

中国と日本は、東アジアに属する一衣帯水の隣国である。両国の人間交流は遥かな古代にまで遡り、現在も続いている。千年以上の中日文化交流史を顧みると、中日間を往復した人間には、遣唐使に代表される入華者と、鑑真らを代表とする入日者がいる。彼らにまつわる史料や日記には、当時の交流の様子が生き生きと描き出されている。遣唐使は「地獄の門」といわれる航路を乗り越え、唐帝国の政治制度や文物などに学ぶため西渡した。だが、航海術が未熟の時代には、さまざまな困難と危険がつきまとっていた。そのことについては、中国の歴史資料や、日本の僧侶である円仁の『入唐求法巡礼行記』などに詳細な記述がある。このような厳しい状況の中で、鑑真は何回もの渡海失敗にもめげず、万里の波濤を乗り越え、自らの弟子と共に来朝した。彼は律宗を日本で広める理想を持ち、弘法のため不惜身命の思いに燃えていたのである。

このような事象は、史料に記録され、建築などで追跡できる事例である。一方、中日交流の佳話として、古くから両国の民間や知識人の間で論じられてきた事例もある。徐福とその伝説は、中日文化交流の美談として語られてきた。これは従来から、東アジアを中心に、歴史・文学・伝説に関わる話題として盛んに取り上げられてきた。このことの歴史的真偽は、不明である。だが、中国・韓国・日本の各地には、徐福に関するさまざまな伝承が残っており、徐福東渡伝説は伝奇色を強め、神秘性を増大させている。

本書では、日本における徐福伝説を中心に、それに関わる民俗文化の展開や役割などを考察した。日本の徐福渡来伝承地に着目し、徐福伝説を懸け橋として東アジアとの交流を探った。まず、歴史資料や筆談資料、日記などの整理を行い、各地域で実地調査を実施した。それらを基に、徐福伝説とそこから生じた祭祀活動や民俗文化などを研究対象として、徐福とその伝説の位置づけを考察した。本書では、歴史学的なアプローチと民俗学的なアプローチという二つの分析方法を採用した。

徐福とその関連文化は、古くから東アジアの文人たちが争って議論してきた話題の一つである。徐福を懸け橋として展開してきた友好交流は、現在も行われている。近年では、徐福故里海洋文化節、国際徐福文化節、徐福文化と海上シルクロード国際学術シンポジウム、徐福映画などの開催と上映が、中国・韓国・日本で相次いでいる。これら徐福をテーマとした文化活動は、三国の徐福文化に対する共感を強め、東アジア諸国の文化交流を促進させている。

現代の徐福伝説は、中国・韓国・日本の各徐福伝承地で活用されている。伝説は、これらの地域間の絆を深め、地域社会の活性化にもつながっている。特に、近年この三国が共同で開催した徐福国際シンポジウムでは、東アジアの徐福東渡伝説を世界無形文化遺産に登録しようとする声が高まった。徐福伝説は、中国・韓国・日本を有機的に接続し、文化・観光・政治などの面で大いに利用されている。こうした伝説を、東アジアの国際的な視点から研究を展開することは、非常に有意義なことであると思われる。

歴史を鑑とし、時代と共に進むことは大事なことである。本書では、歴史資料と民間伝承を結びつけ、歴史学的なアプローチと民俗学的なアプローチを試みた。この二つのアプローチを統合し、徐福伝説とそれに関する民俗文化の研究を行った。特に、「中日韓文化協力」という時代背景の下、改めて歴史・伝説・文学などの分野で話題と

なった徐福伝説に関する研究を展開することは、今の時代の流れに合っているといえる。それだけでなく、中国・韓国・日本の三国の文化的アイデンティティを向上させることにもつながるであろう。

本書では、各徐福伝承地でフィールドワークを行い、現時点での徐福に関する民俗文化に着目した。そして、徐福伝説と人々との生活の結びつきを考察した。また、歴史書に記された徐福記録と民間に伝承された徐福伝説の比較分析から、その時代ごとの変化や特性などを論じた。

本書においては、いくつかの仮説を提出した。今後のご批判、ご教示を切にお願いしたい。最後に、本書がこれからの中国・韓国・日本の文化交流や、三国の友好発展に寄与できれば幸いである。

なお、本書は二〇二〇年度江蘇理工学院社会科学基金プロジェクト『日本の徐福伝説とその民俗文化に関する研究』（研究代表者：華雪梅、課題番号：KYY20520）の成果の一端である〔本書為二〇二〇年度江蘇理工学院社科基金項目〝日本的徐福伝説及其民俗文化研究〟（主持人：華雪梅、批准号：KYY20520）的階段性研究成果〕。

二〇二〇年二月六日

華　雪梅

●目次

序文……小熊　誠　1
まえがき……5
序章……19
一　問題提起　19
二　研究目的　21
三　先行研究と本書の視点　22
1　歴史学的研究　23
2　民俗学的研究　29
3　本書の研究視点　33
四　調査地域と研究方法　35
1　調査地域の選定　36
2　研究方法　37
五　本書の構成　39
第一章　文献から見る徐福伝説……43
はじめに　43

一　『史記』に登場した徐福　44
1　徐福上書　45
2　徐福弁明　47
3　徐福不帰　49
4　東渡実像　51
二　史料から見る徐福東渡伝説の変容　54
1　歴史文献の記録　54
2　逸書にまつわる「筆戦」　71
おわりに　78
第二章　東アジアにおける徐福伝説の現在……81
はじめに　81
一　中国の徐福伝説　82
1　徐福故郷の論争　83
2　徐福集団の出港地　87
3　関連事物の建造　93
4　中国の徐福研究組織　93
二　韓国の徐福伝説　101
1　徐福一行の移動ルート　102
2　徐福記念公園の建造　106

3　韓国の徐福研究団体　108
三　日本の徐福伝説　108
1　地図から見る日本全国の徐福伝説　112
2　日本各地の徐福伝説　113
3　日本の徐福研究会　118
おわりに　119
第三章　青森県中泊町の徐福伝説に関する民俗文化……123
はじめに　123
一　調査地概要　124
二　青森県中泊町の徐福ゆかりの地とその伝説　126
1　権現崎に漂着した徐福一行　126
2　目印としての権現崎　130
3　「航海安全の神」徐福を祀る尾崎神社　133
4　尾崎神社の航海信仰　139
5　尾崎山で発見された仙薬　142
6　徐福と船の右櫓伝統　144
7　最北端の徐福石像　146
三　「中泊徐福まつり」の構造　149

1　祭りの背景と由来　150
2　第五回「中泊徐福まつり」の仕組み　151
3　「中泊徐福まつり」の役割　157
四　中泊町の徐福伝説に関する民俗文化　163
1　徐福ねぶたの登場　163
2　徐福関連商品の開発　167
3　郷土芸能への影響　169
おわりに　171
第四章　和歌山県新宮市の徐福伝説に関する民俗文化……175
はじめに　175
一　調査地概要　176
二　徐福公園にある徐福伝説を語る事物　177
1　徐福立像　179
2　不老の池　180
3　秦徐福之墓　182
4　七塚之碑　187
5　秦徐福碑　191
6　由緒板　192
7　紀伊半島で発見された仙薬　197

三　徐福伝説と熊野信仰との関連　198
1　無学祖元の漢詩　199
2　『活所備忘録』の記録　202
3　『海東諸国紀』の記述　204
4　徐福伝説と熊野信仰を結びつける背景　205
四　新宮市の徐福顕彰活動の形成と変遷　211
1　一覧表から見る「熊野徐福万燈祭」の歴史と発展　212
2　新宮市の徐福顕彰活動の各段階　217
五　「熊野徐福万燈祭」の構造　220
1　徐福供養式典　221
2　花火大会　227
3　「熊野徐福万燈祭」の役割　231
六　新宮市の徐福伝説に関する民俗文化　236
1　「医薬の神」としての徐福　237
2　徐福関連商品の開発　243
3　徐福音楽の創造　247
おわりに　248
第五章　佐賀県佐賀市の徐福伝説に関する民俗文化……253
はじめに　253

一　佐賀市徐福伝説の概要　255
1　徐福上陸地の二説　255
2　ビャクシンの古木と千布の地名由来　257
3　神としての徐福　257
二　佐賀市の徐福ゆかりの地とその伝説　258
1　有明海から上陸した徐福一行　258
2　浮盃・寺井・千布という地名の由来　261
3　片葉の葦と筑後川の珍魚「斉魚」　266
4　樹齢二二〇〇年以上のビャクシン伝説　271
5　金立山で発見された仙薬　274
6　徐福とお辰との悲恋伝説　278
7　金立神社大権現としての徐福　281
8　徐福が発見した古湯温泉　291
三　一九八〇年金立神社例大祭の構造　298
1　金立神社例大祭の歴史と由来　299
2　金立神社二二〇〇年大祭趣意書　301
3　一九八〇年金立神社例大祭の仕組み　303
4　金立神社例大祭の役割　309
四　佐賀市の徐福伝説に関する民俗文化　312
1　「農業の神」・「雨乞いの神」としての徐福　313
2　徐福長寿館の徐福伝承　313

3　徐福関連商品の開発　316
おわりに　318
終章……323
一　日本における徐福伝説の形成　324
1　伝説の発生　324
2　伝説の伝播　324
3　伝説の変化　325
4　伝説の伝承　326
二　徐福伝承地の特徴　330
三　徐福伝説の時代における特徴　333
1　伝説の発生に見る中国古代の神仙思想　333
2　日本渡来説に見る日本中古の中国崇拝　334
3　中日の漢詩に見る日本中世の文芸状況　335
4　日朝の筆戦に見る日本近世の文化争古　336
5　各地の伝承に見る日本現代の友好交流　337
四　徐福伝説の現代的役割　338
五　今後の課題　339

序章

一　問題提起

本書は、徐福伝説の民俗文化を研究するものである。日本における徐福伝説を中心に、それに関する民俗文化の展開と役割を考察する。

徐福（じょふく）は、中国の秦朝（紀元前三世紀）の方士である。方士とは、中国古代において医術・占筮（せんぜい）・天文・神仙の術などの技術に精通する人を指す。徐福の名の初見は、徐福の時代から一〇〇年ほど経って司馬遷が書いた『史記』である。それによれば、徐福は秦の始皇帝の命を受け、三〇〇〇人の童男童女と百工（技術者）を連れ、不老不死の仙薬を求めるために、東海の三神山（蓬莱・方丈・瀛州）へと出航した。しかし、徐福は「平原広沢を得て王となり帰らず」と言われており、故国には帰らなかったとされている。『史記』に記された「平原広沢」の所在については、国内外の歴史学・考古学・民俗学などの学術分野の研究者の間で、盛んに論争が起きている。

徐福が始皇帝の命を受け、東海の三神山に不老不死の霊薬を探す話は、後世の史料編纂に伴い、さまざまな推測が生じていた。その中で、徐福一行が日本に渡来して定住したという伝説は広く伝えられている。このような歴史

に基づいて生じた徐福伝説は、日本に止まらず、韓国にもある。徐福らの足跡は東アジアに多く残っているが、さらにアメリカ大陸に辿り着いたという説[1]もある。本書では、主に東アジアにおける徐福伝説の様相を考察する。そのため、アメリカ大陸に辿り着いたという説は除外する。

東アジアを代表する中国・韓国・日本では、徐福伝説はさまざまな形で伝えられている。筆者はまず、徐福に関する史料記録を整理した。そして徐福の東渡に関する考えは時代の経過によって変化していることを見出した。東アジアにおいて、徐福の東渡は二〇〇〇年余りの歴史上でどのように位置づけされてきたのだろうか。このような問題意識を持って、筆者は、中国と日本の徐福伝説伝承地を訪れ、徐福伝説の現在を探ってみた。

中国では、徐福は歴史に登場した実在の人物として認識されている。一方、韓国と日本においては従来から伝説上の人物として取り扱われている。中国歴史に登場した徐福という人物と徐福東渡という歴史上の事件は、徐福伝説の発生と伝播にとって不可欠な起源となるものである。もちろん、中国でも徐福は歴史的に実在する人物という認識だけではない。東部沿海地域を中心に伝説上の人物としても扱われている。徐福一行の渡海について、中国の各地に出航伝説がある。また、韓国では通過伝説として、さらに日本では渡来伝説として多くの地域に存在している。

日本では、徐福が立ち寄ったとされる伝説ゆかりの地が、全国で二〇か所以上ある。それは最北の北海道から最南端の鹿児島県まで分布している。その伝説は古くから日本全国で口碑として定着し、民間で伝えられている。また、文人や知識人の筆によって、さまざまな史料に記録されている。これらの史料の痕跡をさかのぼっていくと、古い時代にあった徐福伝説の存在状況も分かってくる。日本では徐福伝説が幅広く伝播し、定着している。その理由を探るには、各地域の徐福伝説のあり方と地元の人々の心意の考察が必要となる。

筆者は日本各地に分布する徐福伝説に着目し、徐福伝説の伝承地に実地調査を行った。各伝承地には、徐福の遺徳を記念する祭祀活動がある。さらに徐福と関連する事物も多く存在する。また、徐福伝説からさまざまな民俗文

化が生じている。徐福は紀元前三世紀の中国の人物である。徐福に関することは、現在でも学術界で明白にされていない。だが、民間では徐福伝説は広く伝播している。本書では、その伝説の伝承の形式と方法を分析していく。さらに、徐福伝説が二〇〇〇年を経て、日本各地に語り伝えられている原因と背景を明白にする。

徐福は現在、日本ではロマンを感じさせる伝説上の人物として認知されている。日本列島の北から南に至るまで、幅広い地域に徐福伝説ゆかりの地が点在している。徐福は中国の歴史上の人物であるが、日本人にとっては外来の人でもある。そのような外来の人物である徐福が、伝説として日本に広く伝播した理由は何だろうか。徐福伝説はどのような変遷を経て、現在に至ったのか。また、ある地域では、徐福を神として祀る神社があるが、その理由は何か。同時に、東アジアにおける徐福伝説の変遷を分析し、徐福伝説から生じた民俗文化にも注目した。本書はそれらの調査と分析を基に徐福伝説の実態とその伝承形式を考察するものである。

二　研究目的

本書では、まず文献資料から徐福伝説の歴史上における変遷を捉える。次に日本における徐福伝説ゆかりの地において行った実地調査を基に、徐福伝説とそこから生じた祭祀活動や民俗文化などを探る。このような民俗学的視点から、徐福伝説と日本人の日常生活との結びつきを考察する。本書は以下の四つの課題を究明することを目的とする。

(1) 東アジアにおける徐福東渡の歴史的変遷と徐福伝説の発生・伝播・変化を明らかにすること。徐福東渡という歴史上の事件は、司馬遷の『史記』に記録され、当時大きな騒ぎが起こった。二〇〇〇年余りの文献記録を

分析し、この事件は時代に沿ってどのような変化をしたのかを明らかにする。そして、徐福東渡という歴史上の事件から、どのようにして徐福伝説が発生したのか、どのように中国・韓国・日本で伝播したのか、東アジアにおける徐福伝説は、発生と伝播する途中で、どのような変化を起こしたのかを解き明かす。

(2) 日本に伝わる徐福伝説の背景と実態を把握すること。徐福伝説は、北海道から鹿児島県に至るまで日本の幅広い地域に分布している。その分布状況に、どのような特徴があるのかを探る。本書では日本全国の徐福ゆかりの地、二〇数か所の中から、青森県中泊町・和歌山県新宮市・佐賀県佐賀市という三つの地域を選定した。そして、それぞれの徐福伝説のあり方を考察し、日本における徐福伝説の発生背景とその現状を明らかにする。

(3) 日本での徐福に関する祭祀活動を研究すること。本書で選定した三つの地域では、徐福に関する祭りが恒例的に行われている。筆者は三つの調査地で実地調査を行った。その調査で判明した徐福に関する祭祀活動を手がかりとして、祭祀活動の目的とその担い手を分析する。さらに、祭祀活動の役割などの視点から徐福伝説と地元の人々の日常生活との結び付きを究明する。

(4) 調査地の民俗文化から、徐福伝説の伝承方法とその現代的活用を分析すること。各調査地では徐福関連商品の開発などによって、地元の人々の生活を豊かにしようとする事例が多くある。町おこしと地域振興のために、徐福伝説の観光面での活用も無視できない。徐福伝説が現代生活に利用される理由を探り、その伝説の裏に隠されている伝承地の人々の心意を解明する。

数多くの先人に研究されてきた。紀元前三世紀、徐福は三〇〇〇人の童男童女を携えて東渡した。歴史家の第一人者である司馬遷は、徐福東渡のことを歴史書『史記』に記録した。その後、歴史家と文人の間で激しい論争が引き起こされた。この徐福東渡とそこから生じた伝説にまつわる論争は、第一章で考察する。

本節では、二〇世紀に入ってからの中国・韓国・日本における徐福に関する研究を対象とする。紀元前一世紀の『史記』から一九世紀末までに書かれた徐福に関連する書物は、徐福東渡のことを、主に著作・賦詩などの形式で記録している。これらの書物は、徐福東渡を理論的な視点から研究した史料ではない。ただし、これらは、東アジアにおける徐福伝説の発生・伝播・変化を示している。本書では、文献記録を利用しながらも、二〇世紀以来のこれらの史料に基づいて行った先行研究を整理する。

徐福東渡という歴史上の事件とそれに由来する徐福伝説は、古くから現代に至るまで東アジア交流史の研究にとって不可欠な要素である。だが、これまでの研究で十分に解明されたとは言えない。次に、歴史学と民俗学の分野から、徐福東渡とそこから生じた徐福伝説に関する研究を略述する。そして、その内容と問題点について考察を加える。最後に、先行研究の検討を基に本書の視点を提示する。

1　歴史学的研究

徐福とその東渡のことは、中国では『史記』をはじめとした書物に記録がある。しかし、一九五〇年代以前には、学術上の問題として認められず、伝説や物語として取り扱われていた。一九五〇年代以降、徐福研究を専門とする研究者が次第に多くなっていった。それらの研究を整理すると、徐福にまつわる論争は次の三つに分けられる。（1）「徐福一行の渡海先」、（2）「徐福は神武天皇」、（3）「徐福の東渡路線と可能性」である。

著者紹介

華 雪梅（か・せつばい　Hua Xuemei）
1990年、中国山東省生まれ。
2019年、神奈川大学歴史民俗資料学研究科　歴史民俗資料学専攻博士課程修了。博士（歴史民俗資料学）。
2020年1月より江蘇理工学院外国語学院講師。
主要論文に、「宋代来華日僧筆談述略」（『東亜的筆談研究』王勇編、浙江工商大学出版社、2015年）、「和歌山県新宮市における徐福伝説について ──「熊野徐福万燈祭」を中心に」（『歴史民俗資料学研究』第24号、2019年）、「徐福伝説と航海信仰に関する一考察──青森県中泊町小泊村を事例に」（『青森県の民俗』第14号、2019年）、「佐賀県佐賀市における徐福ゆかりの地とその伝説」（『非文字資料研究』第18号、2019年）など。

徐福伝説と民俗文化　地域から東アジアとの交流を探る

2021年3月10日　印刷
2021年3月20日　発行

著者　華 雪 梅
発行者　石 井 雅
発行所　株式会社　風響社
東京都北区田端4-14-9（〒114-0014）
℡ 03(3828)9249　振替 00110-0-553554
印刷　モリモト印刷

Printed in Japan 2021 © Hua Xuemei
ISBN978-4-89489-279-8 C1039